
敵は黒い総帥!!

いとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敵は黒い総帥！！

【Nコード】

N7752I

【作者名】

いとり

【あらすじ】

今日の敵は“奴”！！

“奴”って何だ！？

(前書き)

どうも、いとりです。

前回のシリーズとは打って変わってのコメディーです。

しかも初挑戦…。

途中から自分でもよく分からなくなりましたよ☆↑

しかもキャラ崩壊気味です！↑

意味分かんなくてもいい！という方だけ読んで頂けると幸いです。↑

ではー。

ある日の万事屋での出来事。

ピンポーン

暇していたある日の午後、部屋の中にチャイムが鳴り響いた。

「銀ちゃん!! きっと仕事アル!」

「やったー! これで生活費なんとかかりますよ!」

喜ぶ神楽と新八を余所に、銀時はダルそうに返事した。

「えー…、楽な仕事だったら引き受けといて!。」

「銀さん! 我が儘言わないで下さい!」

新八が怒っている間に、神楽はスキップして玄関に向かった。

「ハイハイ、誰アルかー？」

ガチャ：

玄関に立っていたのは、黒い隊服の男2人。

「よお。」

「お邪魔しますぜイ。」

土方と沖田だった。

「…………。」

神楽は暫く2人を見つめて言った。

「今日は休業日アル。また来るヨロシ。」

何事もなかったかのようにドアを閉めようとしたが、ドアを土方が
掴んだ。

「待てコラ、お前等に休業日なんてもんはねえだろーが!!俺達は
依頼しに来たんだよ!」

「きゃーッ!!このオッサン、変態アル!!助けてー!!」

ドアを引っ張りながら、神楽が叫ぶ。

「うわぁ…、土方さん、遂にこんな少女にまで手え出しやがった…。
やった、これで副長の座は俺のもんでさア。」

「総悟おお!!テメーはどっちの味方だぁッ!?!」

ドアを負けじと引っ張る土方を余所に、沖田がそう呟いた。

そこに、様子を見に来た新八。

「神楽ちゃん、何してんの…ッて、土方さんに沖田さんじゃないですか！」

「おい！！眼鏡！早くこの小娘退かせ！」

「神楽ちゃん、一先ず落ち着いて。話だけでも聞こうよ？」

「嫌アル！絶対祿でもない話ネ！」

新八に反発する神楽。

「オイ、チャイナ。」

「あッ！？」

「コレ何だ？」

話し掛けた沖田の手には、赤い小さな箱があった。

「酢昆布!!」

好物に気を取られ、力が抜けた隙に土方がドアを引っ張った。

「ぎゃあッ!」

そう言って、神楽は前のめりになった。

奮闘の末、沖田のセコいやり方によって、真選組が勝利した。

*
*
*

中央のソファーに向き合って座る5人。

「神楽、しっかりしろよ。銀さん、1番苦手な人達だよ…。」

「だって、こんちきしょーが酔昆布をおお…。」

「貰えたんだから文句無しでさア。」

「う…。」

返す言葉もない神楽。

その手にはしっかりと、先程の酔昆布が握られてあった。

「じゃ、本題に入る。実は…。」

「アレー？銀さん、まだ依頼受けるって言ってないよー？」

「なッ…!？」

鼻で笑う銀時に、マジ切れ寸前の土方。

「ちょっと、銀さん！真面目に聞きましょうよ！ちゃんと代金も

前払いでもらったんだから。」

「えー。いいじゃん、いつも俺達から税金とってるしいー。」

ブチッ

「テメー!!! いい加減にしやがれ!!!」

「あーッ!!! 暴力反対!」

とうとう、土方は切れてしまった。

呆れる3人。

その時だった。

モゾ…

—…ん?

神楽は自分の手に違和感を感じた。

モゾモゾ…

—…何か…、痒い？

不思議に思っ、手元を見た瞬間…！。

「ぎゃあああああッ！…！！」

『！？』

そう叫ぶと同時に、向かい合わせに座っていた沖田に神楽が飛びついた。

ゴンッ！！

「いだっ!!」

急に飛びついて来た神楽を受け止められず、沖田の顎に彼女の頭が勢い良くぶつかる。

「…ッの、クソチャイナ! いきなり何すんでィ!! つーか離れろ!!」

沖田の服を掴んで、ガタガタと震える神楽。

「どッ…どうしたの神楽ちゃん?」

心配した新ハが聞いた。

“奴”アル…ッ!!」

「へ?」

「…ソファアの上に、あいつがあああ!!」

男達の視線がソファーへと移る。

ソファーの上には、長い触覚が2本、光り輝く黒い体、俊敏な動きをする“奴”がいた。

『ゴ…っ、ゴキブリー！！？』

騒ぎまくる5人。

「とっ…とにかく、早く捕まえましょう！」

「潰せばいいじゃねーか！」

「駄目ー！！ソファー汚れる！銀さん、ソレ気に入ってたんだから！
！新ハ！殺虫剤！殺虫剤持って来い！」

「はい！！！」

急いで取りに行く新ハ。

と、その時…、

ブーーーーーン

『飛んだああああ!?!』

銀時と土方目掛けて“奴”が飛んできた。

「新ハーーーー!! 早くーッ!!!!!!」

半泣きの銀時。

“奴”はもう目の前だった。

「銀さあああん!!!!!!」

銀時に向かって、やっと見つけた殺虫剤を投げる新ハ。

それをキャッチして狙いを定めた。

「死ねえええ!!」

ぷし…っ

「……………へ？」

どうやら新ハが見つけた殺虫剤は、空だったらしい。

ピタリ…

……………あ。

銀時の顔に“奴”が止まる。

「んぎゃあああああ!! 取ってー!!」

走り回る銀時。

「こっち来んじゃねえー!!」

必死に逃げる土方。

けれど“奴”は直ぐに銀時の顔から離れ、違う場所に飛んで行った。

肩で息をする銀時と土方。

「…新ハーー!! お前ワザとかコラァア!？」

「違いますよ!! 誤解ですッ!! ぐえ。」

2人が揉めていると、今まで静かにしていた沖田が声を出した。

「……旦那ァ、出来るだけ早く“奴”を仕留めて下せイ。じゃねえと俺、もう少しで理性ぶっ飛びそうでさァ。」

「は!?! 何言ってるの!?!」

神楽はまだ沖田の腕の中にいた。

「離せばいいじゃん!!」

「それがコイツ、俺の服掴みながら氣い失っちゃったみてえで…、何かいつものギャップが…」

「駄目ー!! 銀さん、絶対に認めないから!!…こうなったら早く“奴”を仕留めねば…ッ!! 新ハ、殺虫剤買ってこい!」

「はい!!」

新ハは急いで家を飛び出した。

*
*
*

新ハが殺虫剤を買いに行っている間に“奴”を探す2人。

「トシ君、居た!？」

「居ねえーよ。…ったく、何で俺がこんな事…」

ぶつぶつと文句を言いながら“奴”を探す土方。

「何処だー?」

床に置いてある物を退かして必死に探している時だった。

カサカサカサ…

「!!」

土方の目の前を“奴”が横切ろうとしているのに気付いた。

「居たーッ!!」

銀時が叫んだ瞬間、土方がとっさに床に置いてある物を掴み、“奴”に振り被す。

ズパーン!!

部屋中に響く乾いた音。

「…あ、反射的に潰しちまった。わりい…。」

そう言って、銀時を見ると、彼の顔は鬼の形相だった。

「!?!」

「……トシ君、君の手にしてる物は何かなあ?」

「あ? 知らねーよ。その辺に置いて…。」

自分が手にした物を見ると、それは銀時の好きなジャンプだった。

「……………」

「それ、何月号かなあ？」

土方の顔に冷や汗が流れる。

「……………今月号。」

その時、新ハが外から帰って来た。

「銀さん、買ってきましたー！…って、もう仕留めたんですか！？
…もおー、僕、行き損じゃないですか。」

溜め息を吐く新ハに、銀時が話し掛けた。

「いやいや、新ハ君、居んじゃねーか。まだゴキブリが。」

「へ…？2匹居たんですか？」

不思議がる新ハ。それを無視して、新ハが買って来た新品の殺虫剤の封をきる銀時。

「…ああ。目の前に、黒い姿のゴキブリが居んじゃねえかあああ！」

ブシーー！！

「ぎゃーー！！」

逃げ回る土方目掛けて殺虫剤をかける銀時。

こうして、今日も1日が過ぎて行くのだった。

＊ ＊ ＊

夕暮れ。

辺りが朱色に染まってた頃、路地には2つの影。

「もう絶対に、万事屋になんか行きたくねえ…。」

そう呟いた土方は、見るからにボロボロだった。

「俺は面白かったですぜい。土方さんがゴキブリ扱いされてるところ。あのまま、殺虫剤かけられて死ねばよかったのに…。」

「デメエ…、人事だと思いやがって…。」

「本当の事でさア。」

その隣りで上機嫌の沖田。

「総悟、…お前、あの娘に手え出してねーだろうな？」

そう聞かれて、沖田はキョトンとする。

「え…、本当に土方さん、あいつにまで手え出し…」

「ちげえよ、阿呆。もし問題起こしたら、また騒ぎになんじゃねえか。」

「ああ、成る程。安心して下せい、ちゅーまでしかしてませんから。」

「そうか、……………」

応えてから、よく沖田の言った事を思い出す。

「なッ…!?!? お前、言ってる側からもう問題起こしてんじゃねーか
!!」

「大丈夫ですって。同意の上だし。」

「余計に駄目だから！あの娘があいつに言ったら……」

その時、後ろから何かが近付いて来る音が聞こえ、急いで振り返ると、

「待てコラアアア！！」

と叫びながら猛スピードで追い掛けて来る銀時が目に入った。

そして、その日は街中に土方の悲鳴が聞こえたという。

敵は黒い総帥！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7752i/>

敵は黒い総帥!!

2010年10月9日22時15分発行